

はこだて天狗

脚本
福島カツシゲ

主な登場人物

坂木直行 (なおゆき)	3 2	(回想 1 0)
浅野真由子 (まゆこ)	3 2	(回想 1 0)
坂木龍介 (りょうすけ)	6 0	
坂木佳恵 (よしえ)	5 6	
前川和男 (かずお)	3 2	
真由子の母 (回想 3 3)		
ゆう (真由子の息子)	4	
町内会長	5 4	
町内会の役員さんたち		
谷澤先生	2 6	
教頭先生	5 1	
天狗 真由子の父・秀樹 (ひでき)	5 7	

○函館公園・こどものくに(回想)

1991年(22年前) 9月下旬の夕方

人影はなく、園内の観覧車、メリーゴーランド、フラワーカップ、飛行塔などの乗り物は、全て止まっている。

チケット売り場には、営業時間が11時～16時と書かれていて、園内にある時計は、17時半を少し過ぎてている。

止まっている観覧車の一番上のワゴンには少年(10歳の直行)が乗って眠っている。少年は、賞状の入った筒と観覧車から見える景色を描いた絵を持っている。

少年の乗ったワゴンが、夕日に照らされている。

○スーパー北斗車内(現在・夕方)

窓際で、夕日に照らされて眠っている直行(32)

列車は、大沼を右に見ながら走っている。テーブルには、空になった弁当と飲み干された缶ビールが2本置いてある。

電車の揺れで、空の缶ビールがテーブルから落ちて目を覚ます直行

直行「そうだ…あの時、見たんだ。」

と言いながら、缶を拾う。

○函館公園・こどものくに(22年前)

松の木を揺らす風が吹き、観覧車で眠っていた直行が目を覚ます。

直行「うーん」

目の前にある松の木の上に人の気配を感じて、ビクツとし、持っていた絵を落としてしまう。

直行「あッ…」

観覧車の下に落ちていく絵を掴もうとして乗り出し、落ちそうになる。

直行「うわッ、うわッ、うわッー！」

シャツの首元を掴まれて引き上げられ、落ちずに引き戻される。

直行「えッ？」

観覧車の下に絵だけが落ちていく。

シャツの首元を不思議そつに触りながら、辺りを見回して、自分が乗っているワゴンの後ろを振り返る。

直行「う、うそ…」

○スーパー北斗車内（現在）

直行が乗ってる車両に、車内販売のワゴンが回って来て、自分の横を通り過ぎてから少しして

直行「あの、すみません」

販売員「ただいま、お伺いします。」

少し戻ってくる車内販売のワゴン

直行「ビールを」

販売員「はい、かじこまりました。」

ビールを取り出して、バーコードに当てようとする販売員に

直行「あ、いや、やっぱ、すいません」

声と同時にバーコードを当ててしまい「ピッ」と音がする。

販売員「あッ…」

直行「あッ…」

直行を見る販売員

直行「すみません…ホットコーヒーを」

販売員「ホットコーヒーですね。」

直行「はい、すみません。」

販売員「かじこまりました。少々お待ちください。」

販売員がバーコードをやり直し、紙コップにポットからコーヒーを注ぎ、砂糖とミルクを直行に渡す。

2人のやりとりの中で、直行のモノローグ

直行(声)「アイツを見たのは、小学4年生の時だった。アイツは、俺を見て笑ってた。いや、笑ってたかどうかは、正直よく覚えてない。」

○ 函館公園・こどものくに(回想)

直行のモノローグに合わせて見えてくる観覧車のワゴン
乗っているのは天狗である。

直行（声）「大きな八手の葉っぱで出来た団扇を扇ぎながら、コッチを見ていた。お祭りの時に歩いていたのを見たこともあるが、それとは違っていた。あの時、観覧車に乗っていたアイツが、お祭りの時と明らかに違うのは、お面じゃなかった。」

観覧車には、大きな八手の団扇を扇ぎながら直行を見ている天狗が座っている。お面ではなく、明らかに鼻が長い

直行「て、てんぐ？」

天狗「天狗様だ。」

直行「てんぐ…さま」

天狗「お前、天狗になんるじゃねえぞ。」

直行「え？あッ…いや、僕は…」

突然動き出す観覧車

直行「うわぁー！」

天狗が乗ってたワゴンが地面に近くなると、扉を開かずに飛び降り、そのまま坂道をゆっくり上って行く。

坂の途中で、突如振り返った天狗は

天狗「言っんじゃねえぞ。」

直行「え？」

天狗「誰にも言っんじゃねえぞ」

直行「は、はい。」

直行は、自分が乗ってたワゴンから降りられず、もう一周回ってしまう。
夕日に照らされている函館の海

天狗の後ろ姿が小さくなっていく。

直行（声）「天狗を見たことは、ずっと誰にも言えずにいた。もちろん、ずっと前に忘れていたが…」

タイトル【はこだ天狗】

○スーパー北斗車内（現在）

車両の連結部のゴミ捨て場に、ビールの缶と弁当を一緒にした袋のまま捨ててトイレに入る直行

直行（声）「なんで小学生の時に見た天狗の事なんて思い出したのか…まあ、なんとなく思い当たるフシはある。たぶん、昨日会社の同僚に言われたからだろう。」

○札幌のデザイン事務所（昨日の回想）

整然とデスクが並ぶオシャレな室内に、カジュアルなスーツを着た社員5〜6人が、それぞれにパソコンに向かって仕事をしている。
直行のデスクには、企画書や見積書などの書類が積まれている。
デスクの後ろを通りかかった、同僚の吉田（32）に、名刺がデザインされた紙を突き出して声をかける直行

直行「なあ、吉田」

吉田「ん？」

直行「頼んでた野村さんの名刺のデザイン、コレじゃダメだって」

突き出されてた紙を乱暴に取り、背を向けてその場から離れる吉田

直行「あッ、それとさあ」

吉田「なに？」

吉田は、ため息を吐いて背中で聞いている。

直行「こういうのは、せめて3つくらい案出せよ。そうすりゃ、コッチだって

どれか選べるじゃ

振り返って戻ってくる吉田

吉田「お前さあ、天狗になるんじゃないぞ。」

直行「え？」

紙を直行のゴミ箱に捨てて去っていく吉田

直行「おい…ちょっと待てよ、吉田ー」

○スーパー北斗の車内

ハンカチで手をふきながら、自分の席に座る。

直行「別に、天狗になんてなってねえよ…」

終点の函館駅に到着する音楽が流れて、荷物を棚から下ろし、デッキまで歩いて行く。

○スーパー北斗 デッキ部分

ドアの外の風景をぼんやりと見ている。

直行「あん時だって、俺は、別に…」

○小学校教室（22年前）

担任の谷澤先生（26）と並んで教壇に立っている直行は、絵と賞状を持っている。

他の児童は自分の席に座っている。

谷澤「この間の写生大会で描いた絵、覚えてつかあ？みんなの中から、なんと

直行が、北海道絵画コンクール小学生の部で銀賞をもらいました。はい、

拍手

児童たちは拍手をしながら「すごいなあ」とか「何もらったの？」と口々に喋っている。

照れている直行

谷澤「はい、し～ず～かくに！静かにしろ！」

○スーパー北斗の連結部分

窓の外に流れる函館の町を見ながら

直行「絵が好きだったんだよな、俺…」

○小学校の校庭（回想・夕方）

直行は、友だちに囲まれて自分の絵を見せている。

友だちも、それぞれ自分の絵を手を持っているが、直行は、その絵を見て笑いながら

直行「なんだ、それ？へたくソだなあ」

友だち「なんだよ、そんな事言っなよ。」

他の友だちからも「そっだよ」と言われ、気まづくなって走り出す直行
校門のところで振り返り

直行「じゃあな〜」

と言って、さっきより速いスピードで走り出し校門から出て行く。

○スーパー北斗の連結部分

ゆっくりと函館駅のホームに入る風景を見ながら

直行「天狗に…なってたのかなあ、俺」

○函館公園 こどものくに（22年前）

観覧車のワゴンにいる天狗

天狗「天狗になるんじゃねえぞ」

直行（声）「あの時は、『天狗になる』って意味が分かってなかったから、天狗

になんてなりたくないって怯えていた。」

観覧車の下に落ちてる絵を見てる。

直行(声)「いつだ?いつ辞めたんだ?画家になるのを、いつ辞めたんだ、俺」

観覧車の上から見える函館の海(津軽海峡側)が、夕日に輝いて海面が

キラキラ光り揺れている。

観覧車は回りながら直行を下へ運んでいき、回ってる観覧車から、恐る

恐る降りて辺りを見回す。

直行「あのお、回ってますけど、僕、帰りますけど…」

絵を拾って、天狗が向かった方向とは逆に走って、公園を出て行く。

○函館駅 (夕暮れ)

ボストンバックと実家へのお土産を持って、改札を出る。

直行(声)「絵が好きだから、美術大学に入って、得意な絵を活かすために、

デザイン事務所に就職して、そこで毎日描いていたのは、絵じゃなかつ

た。だから…描かなくなった。」

○市電のりば 函館駅前

電車を待っている直行

『函館どつく』方面行きの電車が到着し、車内から降りてきた幼馴染の

前川和男(32)に声をかけられる。

前川「ナオ?」

直行「あッ、カズ？」

前川「やっぱ、ナオだよな！」

直行「ああ、久しぶりだな」

後ろに並んでた人に押されて

直行「あ、すみません。」

入り口から少し外れて話す2人

前川「なに、帰ってたの？」

直行「いや、いま帰ってきたところ、ほら」

ボストンバックと、お土産を見せて

直行「ちょうど連絡しようと思ってたんだよ。有給使って遅めの夏休みもらってきたから、しばらく居るし、久しぶりに飲もうと思ってさ」

前川「そうか、じゃあ、今晚どうよ？」

直行「相変わらず決めるの早いな。まあ、別に予定ないし、とりあえず荷物置いてから連絡するわ。」

話しながら電車に乗り込んでいく直行

前川「ああ。で、どこに泊まるんだ？」

直行「え？実家だよ。」

前川「え？実家？」

直行「ああ。え？実家たる、そりゃ

後から走って乗り込んできた乗客に押されて、奥に入っていくながら

直行「じゃあ、また後でな」

前川「実家ってさあ…」

直行「え？なに？」

電車の扉が閉まり、前川の声が、かすかに聞こえる。

前川「だ・か・らあ、旅館……」

直行は「(え？聞こえないよ)」

ジェスチャーで答える

発車する電車を見送りながら、ポケットから携帯を出してメールをする

前川

○携帯電話の画面

『送信しました』の文字

○電車内

電車の中、深刻な顔で携帯を見つめてる直行

直行「うそ……だろ？」

直行(声)「3ヶ月ほど前、実家に電話した時、たしかに母さんの様子が少し変わった。でも、もっとおかしかったのは父さんだったみたいで」

○直行の札幌のアパート (3ヶ月前の回想・夜)

散らかった部屋の窓を開けて、洗濯物を取り込みながら、母の佳恵と電話で話をしている直行

直行「へん？へんって？どついう風にさ」

佳恵（声）「うん、元気がないっていうか、時々ぼんやりしてる事が多くな
ったっていうか…」

直行「それって、まさかボケじゃないの？」

佳恵（声）「そういう感じでもないのよ、なんか私に隠し事してるみたいで」

直行「うわッ、うわッ」

ヤカンのお湯が沸いてるのに気づいて、急いでキッチンに行って、ガスの火を止める。

佳恵（声）「なにっどつしたの？」

直行「え？なんでもないよ。それで、隠し事って、仕事の事？」

ヤカンを持ち上げて

直行「熱ッ！」

○直行の実家（旅館）の玄関（回想）

玄関の横にある旅館の受付に使ってる小さな部屋で電話してる佳恵

佳恵「なに？何してるの？」

直行（声）「え？いや、今、会社から帰ってきたばっかだし、いろいろやる事
あるんだよ。で、なんだっけ？」

佳恵「だから、隠し事が何かあるんじゃないかってさあ…」

直行（声）「そうかなあ〜」

佳恵「いや、もちろん、そうじゃなきゃ、それでいいんだよ、その方がいいん
だけだね。」

○直行の札幌のアパート（回想）

お湯を入れたカップラーメンを持って、キッチンから部屋に移動し、散らかったテーブルの上を払って、その上にカップラーメンを置く。

直行「旅館、うまくいってないの？」

佳恵（声）「まあ、儲かってはいないわよ。2人でノンビリやってる旅館だからね。あッ、いや、大変だよ、大変なのよ、もう歳だから大変。あんたが帰ってきてくれたら、もうちょっと楽できるんだけどね…」

電話を聞きながら、テーブルの周りの散らかった物をどける。
テレビのリモコンが出てきて、それを拾ってテレビをつける。

直行「母さんの思い過ぎなんじゃないの？」

佳恵（声）「えっ？」

○直行の実家の居間（回想）

元氣ない父の龍介（60）が、お茶を飲みながら大きなため息をつき寝転がって天井を見ながら考え事をしている。

直行（声）「親父、今年還暦だろ？そりゃ、元氣ない事だつてあるし、ぼんやりもするつて。今までが元氣すぎたんだから、そんなに心配することもないんじゃないの？」

佳恵（声）「そうだといいんだけどね。」

ムクツと起き上がる龍介

龍介「おい、ちよっと!」

○実家の玄関横の部屋 (回想)

龍介 (声) 「いないのかあ?」

龍介の声が聞こえて、居間の方を見ながら

佳恵「え?は、はい!」

直行 (声) 「なに?」

佳恵「いや、お父さんがね」

龍介 (声) 「ちよっと話がある」。

佳恵「はあい、今行きます」。

○直行のアパート (回想)

カップラーメンのフタを開けながら

直行「俺も時間できたら帰るからさ。いま、ちよっと手が離せないから、また

電話するわ。」

佳恵 (声) 「そんなこと言って!もつ、2年も帰ってないじゃないの」。

言い終わらないうちに電話を切り、テレビを見ながらカップラーメンを
すする直行。

○市電『函館べつく』前駅 (現在・日暮れ)

電車を降りて、足早に実家に向かって歩く直行

直行（声）「札幌からなんて、そんなに遠いわげじゃないのに、なんで帰らなかつたんだ。そんなに遠くないから、いつでも帰れると思って…」
実家が見える曲がり角を曲って

直行「ウソだろ…」

○実家跡地

直行「どこ…いったんだ、実家…」

看板には『売地』と不動産屋の連絡先が書かれている。

その前で、呆然と立ち尽くす直行の後ろ姿

○携帯電話の画面

手に持っている携帯の画面には、前川から『お前んとこの旅館、今もうないぞ』というメールが届いている。

○実家の前

慌てて、携帯で『実家』と登録してる電話番号に電話をして、声が聞こえるとすぐに

直行「もしもし、俺…」

音声「おかけになった電話番号は」

直行「だけど…」

音声「現在、使われておりません。」

アナウンスが流れる。

カバンとお土産を落として、電話を切り、もう一度、携帯電話をかける

直行「もしもし、カズ？あのさあ、ウチって…いま、どこにあるの？」

○函館山の麓のマンション（夜）

マンションのエントランスにあるインターホンのボタンを、ゆっくりと

『303・呼び出し』の順番で押す直行

佳恵（声）「はー」

母親の声を確認してため息をつき

直行「俺だよ」

○303号室の部屋

インターホンの画面に映っている直行を見て

佳恵「あら、直行ー久しぶりじゃないの！帰って来たの？」

インターホンの画面にアップになってる直行は、周りを気にしながら小声でしゃべる。

直行「まあ、ここには『帰ってきた』って感覚ないけどね。」

佳恵「そうよね、初めてだもんね、ここ。母さんだって最近なのよ、ここに来

たの

直行「そうだろうね。少なくとも3ヶ月前までは、ここじゃないだろうから」

佳恵「よく分かったわね、ここ」

直行「カズに聞いたよ。」

佳恵「そうね、カズくんならね」

直行「とりあえず開けてよ、ここ」

佳恵「え？ああ、ごめんごめん」

インタ―ホンを切ると画面から消える直行

玄関に向かう佳恵

○マンションのエントランス

自動ドアの前で待つ直行だが、ドアが開かない。

直行「ダメだよ、開ける前に切っちゃ…」

○303号室の玄関前

玄関の扉が開いて、佳恵が笑顔で出てくる。

佳恵「おかえり…あら？直行、どこ？」

インタ―ホンが鳴り、リビングに戻る。

佳恵「はい、はいはこ」

インタ―ホンに出る佳恵

さっきより、画面いっぱいには、直行のアップが広がっている。

直行「何してくれてるの」

佳恵「あら？ちよつと、*ビュッ*してるの？」

直行「下だよ、マンションの下のドアの前！」

画面から顔がハミ出ている。

佳恵「開いてない？おかしいわね。なんかねえ、まだ引っ越してきたばかりだからよく分からないの。あれ？このボタンでいいのかしら？」

直行の鼻しか映ってない画面

直行「知らないよ、俺」

○マンションのエントランス

突然、オートロックの扉が開く。

マンションの管理人が、内側から出てくる。

掃除用具を持って直行を見てる。

直行「あ、どうも、すみません。」

佳恵（声）「え、なに？開かない？」

直行「開いたよ！（管理人さんに）どうも、ご苦労さまです。」

佳恵（声）「いっえ。」

直行「母さんにじゃないよー！」

管理人「…」

管理人が、直行をジッと見てる。

直行「あ、あのお…303号室の息子です。」

管理人「それは、どうも。」

直行は、お辞儀をしながらエレベーターに向かう。

エレベーターの前で待っていると、管理人の視線を感じて

直行「3階ですもんね。階段でね…どうも失礼します。」

階段を上がっていく。

○部屋のリビング

テーブルの上に札幌のお土産『北菓楼』が開けられていて、直行が食べながら

直行「偶然カズに会ってなかったら、俺パニックってたよ。」

キッチンでお茶を入れてる佳恵

直行「ねえ、俺の話聞いている?」

佳恵「聞いてますよ、悪かったわよ。」

キッチンからお茶を持って来ながら

佳恵「あんたは、なんでそうやって自分で買ってきたお土産を自分で食べるの!」

直行「あのさあ、忘れる?普通、忘れる?」

佳恵「だから謝ってるでしょ。いろいろ急だったから、連絡するの忘れてただけでしょ。」

直行「だけ?忘れてただけ?いくら急でも、実家を買ったこと息子に言うの忘

れる？まず相談するだろ？」

佳恵「何言ってるの！るくに帰っても来ないで、こんな時だけ息子面して！」

直行「するよ！息子なんだから。息子面するでしょ！」

佳恵「そもそも帰ってくる前に連絡ぐらいいしなさいよ。居て欲しい時に居てくれなくて！」

直行「なんだよ、それ」

佳恵「ホントに大変だったんだよ！」

直行「そりゃそうだと思うよ。家売るぐらいだから。で、何で売ったの？」

佳恵「お父さんが…」

直行「ちょっと、え？そういえば、親父は？なに？親父になんかあったの？」

佳恵「え？」

直行「なに？」

佳恵「あれ？」

直行「なんだよ？」

佳恵「それも言っただけだったわけ？」

直行「それをもって、なんだよ、それをもって。え？聞いてないよね…たぶん。」

佳恵「あ、そう。言っただけだったか…そうかそうか…」

キッチンに戻る佳恵に

直行「なに？なにがあったの！」

○居酒屋【龍】りょう【】の前（夜）

市電通り（恵山国道）から少し路地に入った小さな居酒屋の前で立ち止

まる直行

開店前で、まだ看板がまだ出ていない。

○居酒屋【龍】店内

カウンターとテーブル席が2つだけの小さな店内

店主の龍介は、調理をしながら鼻歌を歌っている。

お店のドアが開く音に

龍介「すみません、まだ…」

龍介が顔を上げてドアを見ると、仁王立ちの直行がいる。

龍介「ん？おおッ、直行か！」

直行「何やってんだよ、親父！」

龍介「なんだ帰ってたのか？」

直行「さっきだよ。さっき帰ってきたばかりで、実家の前で呆然としたよ！」
扉を閉めて店に入ってくる。

龍介「実家の前って…あれ？言ってなかったのか？母さん、お前に言ってなかったのか？」

直行「言われてないよ！」

ため息をつきながらカウンターに座る直行

龍介「じゃあ、アッチも聞いた？聞いちやったか？」

直行「聞かなきゃ、ここ分かるわけないだろ！ったく、何考えてんだよ。」

龍介「母さんもオシャベリだなあ。直行には、時期を見て俺から話すって言ったのになあ。ビールでいいか？」

調理の手を止めて、瓶ビールを出そうとする龍介

直行 「なんで笑ってんだよ…なあ、ふつう黙ってる？」

龍介 「ん？それは、人それぞれだろ」

直行 「息子だよ…俺、息子だよ！」

龍介 「何が息子だ！ろくに帰っても来ねえくせに、たまに帰ってきたら息子面か？」

直行 「またかよ！」

龍介 「また？」

直行 「似たもの夫婦だなあ！」

龍介 「まあ、夫婦ってというのは微妙だけだな。」

ビールとコップ、栓抜きを出しながら

直行 「カズも呼んだから、コップもう一個」

龍介 「そうか、カズぼうも来るか。」

コップをもうひとつ受け取って

直行 「で、なに、どういうことなの？」

龍介 「まあ、そんな怒るな。母さんとは何度も話し合って、お互い別々の道を歩んでいこうって決めたんだから」

直行 「どっかの芸能人か！はあく普通、息子には相談するだろ、離婚する前に相談するだろ！家売る前に相談するだろ！」

小鉢に煮物を入れて直行の前に出す。

龍介 「もう、母さん出してたか？」

直行 「何を？」

龍介 「離婚届」

直行「見せられたよ。」

龍介「そうか。だったら、まだ一応夫婦ってことだな」

直行「何言ってるんだよ!」

龍介「母さん、怒ってたか?」

直行「呆れてたよ。いい年して何やってんだよ。まったく」

龍介「年は関係ないだろ!母さんから、どういふふうに聞いているか知らんけど、相手の女とは、もうちゃんと切れてるからな。たしかに、3ヶ月前は修羅場だったけどな。もう心配するな。」

直行「心配なんかしてないよ!まったく、俺が結婚する時どうすんだよ!」
皿に煮魚を入れて出す。

龍介「なんだ、そんな相手いるのか?」

直行「いないよ。まだいないけど、いずれ結婚する時、相手の家族になんて挨拶すんだよ。」

龍介「正直に言えばいいだろ。両親は現在、別々の人生を歩み出しています。
っ」

直行「カツコ良さに言うなよ!」

龍介「お前は、そうやって体裁ばかり気にするなあ。普通は逆だぞ!」
器にポテトサラダを入れて出す。

直行「はあ?」

龍介「普通は親が体裁を気にすんだよ。その親が体裁気にしてないんだから、いいだろ。」

直行「なんなんだよ、その言い草!」
扉を開ける音に反応する龍介

龍介 「すみません、まだ…」

前川が入ってくる。

龍介 「おう、カズぼうか！どうぞ」

笑いながら店に入ってくる前川

前川 「聞こえてるよ、外まで。ねえ、言ってなかったの？おじさんたち、ナオに言ってなかったの？」

直行 「なんで楽しそうなんだよ。だいたい、幼馴染が全部知ってて、息子が知らないって、どうなのよ…」

龍介 「それはアしだぞ。遠くの息子より近くのカズぼうだ。今じゃカズぼうの方が、お前より息子みたいなものだな」

直行 「はあ？」

開店の看板を出しながら話してる前川

前川 「まあまあ、おじさん。俺、いつものね」

直行 「いつものって…この常連なのかよ…」

龍介 「来るって聞いてたから、もう出してるよ」

直行 「俺のじゃないのかよ…」

龍介 「お前は、何が好物だったっけ？」

直行 「卵焼き」

龍介 「焼くか？」

直行 「焼いてくれよ！」

龍介 「しょうがねえな」

直行 「しょうがねえって、なんだよ……」

○居酒屋の外

扉が開き、サラリーマン客が3人出て来て、その後から前川が顔を出す。

前川「ありがとうございます」

のれんを下げて店内に入る前川

店の外に置いてる看板の明かりが消える。

○居酒屋店内

テーブル席で龍介が寝てる。

カウンター席の洗い物を下げる前川を見ながら日本酒を飲んでる直行

直行「なんだかなあ」

前川「ん？」

直行「いや、ホントにカズの方が息子みたいだよな。」

前川「ええッ、そうか？」

直行「そうだろうが。俺、なぐんも知らなかったんだぜ。家売っちゃったのも離婚届の事も」

前川「まあ、そうだけど…」

直行「ったく、なにやってんだよ、親父もお袋も」

前川「今日の親父さん、明らかに、いつもよりテンション高かったぜ」

グラスを持ってカウンターから出てくる前川

直行「そうか？」

前川「ああ。酔うのだって、いつもより早かったもんな」

直行の横に座り、日本酒を手酌でグラスに注ぐとする。

前川 「もうな」

直行 「ああ、悪い悪い」

手酌の日本酒を取ろうとするが

前川 「いいよいいよ、自分でやるよ。」

自分のグラスに注ぎ、そのまま直行のグラスにも日本酒を注ぐ。

前川 「お前が札幌行ってからも、けっこう家に遊びに行ってたからな」

直行 「そうだったな」

前川 「俺さあ、両親早くに死んじゃって、ばあちゃんと2人で住んでたから、勝手にホントの父さんと母さんみたいに思ったりしてさ」

直行 「いや、親父やお袋だって、お前の事そついう風に思ってたと思うよ。それに、ちよくちよくお前がうちに遊びに行ってるの聞いてたから、俺は結構気が楽だったし」

前川 「え？」

直行 「楽だったよ、ホント…」

前川 「そうか」

テーブル席の龍介がイスから落ちて大きな音がする。

それでも寝ぼけたままの龍介

直行 「なんだよ、親父、しっかりしろよ」

テーブル席に向かい、龍介をイスに座らせて

直行 「なんか、軽くなったなあ」

前川 「親父さん喜んでたぜ」

直行「え？」

前川「美術大学合格して札幌行ってから、俺が遊びに行くたびに『やっぱり、

直行って名前は間違ってたな』って言った。」

直行は、カウンター席に戻って自分のグラスに日本酒を注ぎながら

直行「こっちの気も知らないでな」

前川「え？」

直行「美術大学なんか行ったら、やっぱり名前に食いついてくるの多くてさ」坂

本君の直行って、坂本龍馬の末裔の画家と、なんか関係あるの？』って、

すげえ言われてさ、そもそも俺は、坂本じゃなくて坂木だったのー！」

前川「パツと見、坂本に見えちゃうもんな」

直行「名前で注目されてさ、その注目に応えられるほどの絵を描くわけでもな

かったしさ、なんか、だんだん重くなったんだよな、名前が」

前川「仕事、どうなんだ？」

直行「仕事？仕事か…」

札幌のデザイン事務所での吉田の言葉と、22年前の公園での出来事が

続けてフラッシュバックのように頭をよぎる。

○札幌のデザイン事務所 (回想)

振り返って戻ってくる吉田

吉田「お前さあ、天狗になんじゃねえぞ」

○函館公園こどものくに (22年前)

観覧車の上にいる天狗

天狗 「天狗になるんじゃないぞ」

○居酒屋店内

直行 「どっかで天狗になってたのかなあ」

前川 「え？」

グラスの日本酒を飲み干す直行

直行 「カズだから話すけどさあ」

前川 「なに？」

○函館公園こどものくに (22年前)

坂を歩いていた天狗が突如振り返る

天狗 「言うんじゃないぞ」

天狗 「誰にも言うんじゃないぞ。」

○居酒屋店内

直行 「やっぱりなあ……」

前川 「なんだよ、言えよ」

直行 「誰にも言うなよ……」

前川 「言わねえよ……」

直行 「実はさあ、俺、子供の頃に見ちゃったんだよ」

前川 「何を？」

直行 「…てんぐ」

前川 「え？」

直行 「天狗、見たんだよ。」

前川 「天狗って湯倉神社の？」

直行 「いや、松前神楽の天狗じゃなくて、本物の天狗」

前川 「え、本物？」

直行 「ああ、俺が見たのは函館公園で……」

前川が笑い出し、その笑ってる顔を見て、直行も思わず笑いながら

直行 「まあ、別に信じてくれるとは思ってなかったけどさ…」

前川が急に声色を変えて

前川 「天狗になるんじゃないぞ」

直行 「え？それって、お前…」

前川 「はこだ天狗のことか！」

直行 「はこだ…天狗？」

前川 「あれ？成人式の後に、みんなで飲みに行って、その話したる？」

直行 「成人式の後？」

前川 「そう。みんな子どもの時に天狗見てたって盛り上がったさ」

直行 「みんな、見てた？」

前川 「あ、そっか。成人式の後って、お前いなかったよな。なんでいなかったんだ？」

直行 「そのまま札幌に戻ったからな。なあ、みんな見てたって？」

前川 「ああ〜そうだそうだ。なんか付き合ってた彼女と成人式のお祝いすると

かなんとか言ってたなあ。どうなったんだ、あの彼女？」

直行「とっくに別れたよ。いいよ、それは。それより、え？みんな見てたって？」

天狗を？」

前川「そうだよ。」

直行「ええ！そうなの？ちよっと待てよ、天狗言ってたぜ『誰にも言っくんじゃねえぞ』って」

前川「だから、みんな黙ってたんだろな。まあ、大人になって、みんな忘れてたんだろうけど、成人式の後で飲みに行った時に、マルが酔っ払ってさ」

直行「マルって、丸山？」

前川「ああ、アイツがさあ…」

○居酒屋の座敷 (12年前の回想)

相当酔っ払ってる丸山

丸山「みんな、驚くな！俺はなあ、天狗にさらわれた事がある！」

○居酒屋店内

直行「アイツ、さらわれたの？」

前川「いや、マルのことだ、話半分だろ。でも、マルが言った後に、みんな『俺

も、私も』って言い出してさ」

直行「お前は？」

前川「俺は、見なかったんだよな。あと何人がいたぜ、見なかったヤツ。で、家帰って、ばあちゃんに聞いたら『秋田のナマハゲ』みたいなもんだって言ってたわ」

直行 「ナマハゲ？」

前川 「ああ、子どもたちが悪いことをしないように、昔から『天狗さん』って
いうのを持ち回りで決めてたんだってよ。」

直行 「そうなの？」

前川 「ああ。最初は『天狗さん』って呼ばれてたみたいんだけど、いつから
か『はこだ天狗』って呼ぶようになって」

直行 「ダジャレかよ……」

前川 「13代目まで続いたんだって。俺たちが小学生の頃」

直行 「13代目でなくなったの？」

前川 「ああ」

直行 「なんで？」

前川 「小5の時に転校した真由子覚えてるか？ほら、お前好きだった？」

直行 「俺じゃねえよ。お前だろ！それに小4だろ、アイツが引越したの」

前川 「そうだっけ？いや、まあ、けっこう男子みんなから人気あったよな」

直行 「ひとりだけ大人っぽかったしな。転校も、なんか急だったよな」

前川 「なんか、親が離婚したって。そういうのって、結局子どもが被害者にな
るんだよ…あ、悪い」

直行 「え？」

前川 がテーブル席で寝てる龍介を見る。

直行 「ああ、そうか。うちも離婚…いや、うちはまだ、いまんとこ夫婦らしい

ぞ。それに、もお、俺もいい大人だしな」

前川 「そうだけど」

直行 「いいいい、うちの事は。でっ」

前川 「ん？ああ、両親が離婚する原因になったのが『はこだ天狗』らしくて」

直行 「なんだそれ？」

前川 「真由子の親父が、13代目の『はこだ天狗』だったんだけどさ」

直行 「ええ！そうなの？」

前川 「天狗に入り込みすぎてさ」

直行 「はあ？天狗に入り込むってどういう事？」

前川 「いや、俺もよく分かんないけど、天狗を極めるっていうか、真由子の父

さん、山上大神宮の裏山で修行してるってウワサがあったらしくて」

直行 「なんだよ、それ！」

前川 「で、奥さんに愛想つかされたって」

直行 「つかすよ。そりゃ愛想つかすだろ」

前川 「で、真由子連れて、町を出て行ったんだって」

前川は日本酒が空なことに気づいて席を立て

直行 「それで引越したの？」

前川 「たぶん。まだ、飲むだろ？」

直行 「ああ…一杯だけな」

カウンタ —の中に2人のグラスを持って入り、日本酒を注ぎながら

前川 「そりゃコッソリ出て行くよな。」

直行 「ま、そうなるよな……」

直行（声）「たしかに、真由子が転校していく時、みんなには、コッソリ出て行った。でも、俺には……」

○弥生小学校前（22年前・夕方）

夏の終わり

小学校から見える函館湾を見ながら、正門の前で待ってる真由子

直行が走ってくる。

直行「用って…なに？」

真由子「あたし、明日引越すの」

直行「え、なんで？」

真由子「家の都合」

直行「へえ、そうなんだ…」

真由子「ねえ、あの絵ちようだい」

直行「あの絵って？」

真由子「こないだ賞をとった絵」

直行「ええ、あれはダメだよ」

真由子「なんでよ、また描けばいいじゃない」

直行「ダメだよ、あれは」

真由子「いいじゃない、ケチ」

直行「それに、今は学校に貼ってあるから、あげるのは無理だよ」

真由子「学校に貼ってなかったらくれるの？」

直行「それは…無理だけど」

○函館湾

夕日を浴びながらゆっくり進んでいく大型船舶が見える

○小学校前

真由子は、函館湾の海を見ながら

真由子「あの絵って、観覧車から見える景色でしょ？」

直行「うん。え？知ってるの？」

真由子「わたしも、あの観覧車好きなの。たまにね、一人しか乗ってない時、

係の人に一番上で止めてもらうの」

直行「そんなことしてくれるの？」

真由子「うん、してくれるよ。」

直行「いいなあ、僕は、いっつも終わってから登ってた。」

真由子「ええ、そんな事してたの？」

直行「先生に言っちゃダメだよ。」

真由子「言わないであげるから、あの絵ちようだい」

直行「ええ、それは…」

真由子「ウソよ。ねえ、今から行こうよ」

直行「どこに？」

真由子「観覧車！」

直行「ええ！」

真由子「早く！」

走りだす真由子

直行「ちょっと…」

どんどん離れていく真由子の後ろ姿を見て、しょうがなく後を付いて行

く直行

真由子の走るスピードが早く、どんどん置いて行かれる。

直行「ちょっと待ってよお〜」

遠くで振り返る真由子

真由子「早くしないと間に合わないよ〜」

直行「え？何が？何が間に合わないの？」

振り向いて走り出す真由子

直行「ねえ、ちょっと待ってよ」

○ 函館公園ごどものくに

観覧車の前に走ってくる直行だが、真由子が見当たらない。

真由子（声）「ここだよー！」

観覧車の一番上に乗ってる真由子

直行「早いよ。」

真由子「遅いよ！早く早く！沈んじゃうよ！」

直行「え、え、ちょっと待ってよー！」

急いで観覧車に登り、真由子の横に座る直行

観覧車に座り、斜め後ろに海が見え、夕日に輝いて、キラキラ光っている。

真由子の後ろ姿に声をかける直行

直行「いいよ」

振り返る真由子

真由子「え？」

真由子の顔が正面に近すぎて、下を向く直行

直行「あの絵、あげるよ」

真由子「ホントに？」

直行「明日、先生に言って廊下に貼ってあるのを返してもらって…」
下を向いてる直行は顔を上げて

直行「あげるよ。転校するからあげる。」

真由子「ホントにホント？」

直行「うん」

真由子「ありがとうー！」

また振り返って、夕日を見る真由子

真由子の後ろ姿を見ている直行

○観覧車の下（日没・少し明るい）

真由子「じゃあ、明日学校だね」

直行「うん」

真由子の走る後ろ姿を見ている直行

真由子は一度振り返って

真由子「じゃあねー！」

と手を振り、また振り返って走っていく。

真由子が振り返って走っていくのを見てから手を振る直行

直行（声）「でも、真由子は学校に来なかった。そして、約束してた絵は…」

○小学校の教室（22年前回想・朝）

誰も座っていない真由子の席を見ている直行は、席を立て扉に向かう。

教室の外で担任の谷澤先生と教頭先生が、コソコソと話をしている。
扉の前で、もう一度真由子の席を見て教室の外に出る。

直行「先生、あの、僕の絵なんですけど…」

谷澤「うん、直行、ちょっと待ってくれ。いま、ちょっと、いろいろあって忙しいんだ。」

直行「はい…」

廊下を走っていく教頭先生と教室の中に入っていく谷澤先生

谷澤「えくっと、みんな、ちょっと自習な」

教室から出て行く谷澤先生の後を、少し早歩きで付いて行く直行。

○職員室の横の廊下

絵の貼ってあった場所を見て、不思議そうな顔をしてる直行

『北海道絵画コンクール小学生の部・銀賞、坂木直行』と書かれた上に
貼ってあった自分の絵がなくなって、違う絵が貼ってあった。

自分の絵と似せて描いているが、明らかに違ってる。

直行「あ……」

景色の中の木の上に、小さく天狗が描かれているのを見つける。

直行「天狗…」

絵を留める画鉅の所に紙が挟まっているのを見つける直行

直行「ん？」

挟まってる紙を取って広げる。

紙には『早く出るようになったので、コッソリ学校に入って、もらっちゃった。ありがとう。大切にするね。真由子』と書かれている。
手紙を読みながら、昨日別れた時のことを思い出す。

○観覧束の下

真由子が一度振り返って手を振りながら

真由子「じゃあね！」

前川（声）「じゃあな」

○居酒屋店内

カウンターで突っ伏して寝てる直行が目覚めます。

前川「じゃあな！」

直行「おわあッ！」

前川「なんだよ、そんなビックリすんなよ。」

直行「ああ、うん…ん？」

前川「だから、俺、帰るって！」

直行「え？ん？あ、お、おう」

カウンターテーブルの上はスツカリ片付けられていて、帰り支度をしてる前川。

前川「それじゃあ…」

直行「ああ、うん、俺もすぐ帰るわ…」

前川「なあ」

直行 「ん？」

前川 「辞めたのか？」

直行 「え？なに？え、辞めてないよ。そんな、辞めないよ。ちょっと遅めの夏休みだって言わなかったっけ？」

前川 「会社じゃなくて」

直行 「え、何？」

前川 「就職した時、言ってなかったっけ？」

直行 「え？」

前川 「とりあえずだ。って」

直行 「……」

前川 「働いて、金貯めるだけだ。って」

直行 「……」

前川 「金貯まったら」

直行 「もういいよ！」

前川 「……」

直行 「もう、いいんだって」

前川 「そうか。なら、いい」

前川が店の扉を開けると、夜が明け始めて、外が少し明るくなっている

直行 「また連絡するわ。」

前川 「ああ。いつ帰るんだ？」

直行 「え？」

前川 「札幌、帰るんだろ？」

直行 「ああ、そうだな…週末には帰るよ。」

前川 「そっか。親父さん、あんな風になったら起きないから、送ってやれよ」

直行 「ああ」

前川「じゃあ」

店から出て行く前川

親父を起こそうとして隣に座る直行

直行(声)「カズの『帰る』ってコトバが、なんか刺さった。俺は、故郷(ふるさと)の函館に帰ってきた。でも、週末になると札幌に帰る。俺の故郷は函館で、でもこのまま仕事をして、いつか結婚して、ずっと札幌にいと、故郷に遊びに行つて、札幌に帰る。いつからそうなるんだろうっ…」
立ち上がる直行

○居酒屋前

勢いよく扉が開く音に、振り返る前川

店の中から出てくる直行。

直行「なあ、カズ！」

前川「なんだ？」

直行「親父は、どこに帰るんだ？」

前川「はあ？」

直行「いや、俺知らないからさ、親父の家」

前川「あ…」

直行「どこに送ればいいんだ？」

呆れた顔で笑いながら、店に戻る前川

○路上(明け方)

2人は、龍介を抱えながら国道まで出て、タクシーを拾って乗り込む

前川「谷地頭までお願いします。」

運転手「はい。」

まだ、路肩の電灯に明かりが点いている町並を走り抜けるタクシー

○谷地頭

古いアパートの前で降りる3人

直行「着いたぞ！なあ、親父！ったく、しょうがねえな」

前川「2階、2階」

一緒に肩を担いでる前川に促されて、階段を上って連れて行く。

○龍介の部屋（明け方）

外の明かりで薄暗い部屋

龍介を肩に担いで入ってくる2人

キッチンを通って6畳ほどの和室に入ったところで、龍介を降ろすと、

その場に大の字になって寝転がる。

部屋の中は、たいした荷物もなく、ガランとしている。

部屋の隅に、いくつかのダンボールが置いてある。

すべてのダンボールにはマジックで『小1』『小2』と順番に書かれて

『中3』まで並んでいる。

直行が『小1』のダンボールを開くと、小学1年生の時に描いた落書きのような絵が、額に入れられてキッチリと並べられている。

前川は、押し入れから布団を出して敷き、龍介を寝かせて布団をかけて、

直行の背中に声をかける。

前川「じゃあ、行くわ」

直行は振り向かずに

直行「ああ、悪かったな…」

扉が閉まる音

ダンボールから絵を出して見ている。

直行「なんだよ…こんなもんだけ持って来るなよ…」

直行の肩が震えている。

○龍介の部屋（昼）

畳まれている敷き布団

直行に掛け布団だけが掛けられている。

古いチャブ台の上に、分単位でめくられていくデジタル時計が置いてあり、

11時59分を表示している。

1枚めくられて12時になるとアラーム音が鳴り、直行は、目覚ましを止

めて、だるそうに起きてくる。

チャブ台に、ごはんと味噌汁と卵焼きが置いてある。

その横には部屋のカギとメモがあり『カギはポスト』と書いてある。

直行「彼女かよー！」

と言って、布団に潜る。

布団の中から手だけが伸びて、卵焼きを一切れつまんで布団の中で食べている。

○アパートの廊下

部屋から直行が出てきて、扉に鍵をかけ、ポストに入れようとして自分のポケットに入れる。

○龍介の部屋

布団は畳んでかさねてある。

食器は洗って、チャブ台の上もキレイに片付けられている。

○居酒屋『龍』店内

カウンターのの中の調理場で、夜の仕込みをしている龍介
扉の開く音がするが、仕込みの手を止めず

龍介「すいませくん。ランチ終わっちゃいました。」

直行（声）「ランチもやってんだ。」

龍介「ん？」

龍介が顔を上げると、直行が立っている。

仕込みを続けながら

龍介「ああ、まあな。で、なんだ？昨日の支払いでもしにきたのか？」

直行「カギだよ」

龍介「ポストでいいって書いていたる」

直行「ついでだったから……ここ置いとくわ」

龍介「…リンゴ酢でも飲んでけや」

仕込みの手を止めて、りんごとおろし器とお酢をカウンターに置く

直行「え？」

龍介「二日酔いにはいいぞ」

直行「セルフサービスかよ」

龍介「あたりまえだろ。こっちは仕込み中だ」

直行「はいはい」

カウンターに座って、りんごを擦り始める直行

龍介は、カウンターの端に置いてある小物入れを指さして

龍介「あそこにロープウエーの割引券とか、五稜郭の割引券あるから持ってっ
ていいぞ。」

直行「観光客じゃないんだからさ」

龍介「どうせ、行くところないんだろ」

直行「そうでもないよ…ま、あんまりないか、行くところ」

龍介「けっこう町も変わったぞ」

直行「一番変わったたのは、自分の家庭環境だけどね」

龍介「痛いところ突くなあ。ま、でも、実際そうだな」

包丁がまな板を打つ音と、りんごを擦る音だけが響く店内
半分ほど擦り終えて

直行「こんなもん？」

龍介「ん？まあ、適当でいいんじゃないやねえか？」

直行「なんだよ、それ」

龍介「そうだ、あそこ出来てたか？」

直行「あそこって？」

小物入れの横に置いてるチラシを指さして

龍介「ほれ、十字街の坂本龍馬記念館」

直行は、チラシを手に取って、坂本龍馬の銅像の写真を見ながら

直行「ハルク・ホーガンみたいな銅像が立ってるところでしょ？2年前に帰ってきた時は出来てたよ、たしか」

龍介「そうか…なんだ、出来たのに入らなかったのか？」

直行「入らないよ。だいたいさ、この龍馬像って、ちょっと笑っちゃうよね
チラシに写ってる龍馬像を龍介に見せる。

龍介「ん？」

直行「龍馬が、一番やらないポーズでしょ。龍馬好きとしてはどうなのよ？」

龍介「まあ、正直、初めて見た時は、ちょっとガッカリしたんだけど…」

直行「だろうね」

龍介「ただ、龍馬は北海道に来たかったからな」

直行「そうなの？」

龍介「蝦夷地を開拓して、新しい国を作る夢を抱いてたんだな。まあ、念願叶わないまま暗殺されたけどな」

直行「へえ…」

龍介「いや、あれだぞ。龍馬に聞いたわけじゃないから、ホントのところは分かんないぞ」

直行「そりゃまあ、そうだね」

龍介「でも、蝦夷に対する思いは強かったんだと思うんだな」

包丁の手を止めて話し出す

龍介「暗殺される8ヶ月ほど前にな、同志に宛てて手紙を書いているんだな」

直行「へえ…なんて書いたの？」

龍介は咳払いをしながら

龍介「ん、んんッ、『小弟は蝦夷に渡らんとせし頃より、新国を開き候八積年の

思ひ、一世の思ひ出に候間、何卒一人でなりとも、やり付申べくと存居

申候。』ってな。」

りんごを擦り終わって、チラシの龍馬像を見ている直行

龍介「あの右手はな、きつと『ワシは、たとえ一人であろうとも、蝦夷地に立

って開拓を成し遂げるぜよ！』って、天に指さしてるんだな。」

直行「イチバーンって事じゃないんだ」

龍介「違うな。『一人でも！』って、覚悟を持って蝦夷への思いを表したポーズ

だな。」

直行「へえ…」

龍介「龍馬に聞いたわけじゃないから、ホントのとは分からんけどな」

直行「…でも、なんかバランス悪くない？」

龍介「マッチョなんだわ」

直行「マッチョ？」

龍介「腕がマッチョ過ぎるんだな」

直行「ああ…マッチョだわ」

チラシの龍馬像を見ながら笑ってる直行

龍介「小さい頃、龍馬になりたくてな」

直行「え？」

龍介「ちょうど龍馬の年を越えた頃に、母さんと旅館始めて、しばらくしてお

前が生まれて、ずっと走ってたからな、60になって急に思い出して焦ってな。このままじゃ龍馬になれねえぞ！ってな」

直行「なんだよ、それ。それで浮気って…」

龍介「いや、それは、まあアレだな…」

直行「龍馬が聞いたら怒るぜよー！」

龍介「だな」

コップにりんごを擦ったのと、お酢を入れて飲む直行

直行「うわッ、酢、入れすぎだな、これ」

龍介「きっかけし、親父も龍馬好きにしては、息子の名前を龍介って、なんか中途半端だな」

直行「とは言っても、まんま龍馬なんて付けられたら、龍馬以外の道なくなるでしょ。逃げらんなくなるよ、龍馬から」

龍介「まあ、そうかもな」

包丁を取って、また仕込みを始めながら

龍介「でも、名前程度から逃げてたら、世の中、逃げることだらけで大変だろ」

直行「……」

包丁が、まな板を打つ音だけが響く

直行の携帯に着信があり、少しわざとらしく大きな声で

直行「お、カズだ」

おおげさに携帯に出る

直行「もしもし、昨日はありがとな。え？いいよ、お金は」

携帯を少し離して、龍介に

直行「いいよね、昨日の支払い」

龍介「ん？ああ、カズぼうの分はな」

直行「なんだよ、それ！（携帯に）いいってさ。え？大丈夫だって心配すんな」

龍介「お前のセリフじゃないだろ」

直行「エッ？ホントかよ！」

龍介「……」

○福祉施設

施設の玄関で電話してる前川

前川「ああ、ちょっと前に章二が、真由子に偶然会ったんだってよ。帰ってき

てるみたいだぞ。外人墓地の丘の上にカフェが出来てて、そこ、真由子

がやってんだってさ。ああ、だから、ちょっと行ってこいよ…え？俺は

仕事が終わるの遅いしき、様子見てくるだけでも。ああ、じゃあな」

電話を切り、車椅子のおばあちゃんをワゴン車に乗せながら話しかける。

前川「ばあちゃん、今日は、湯の川に温泉に入りに行くよ。楽しみだね」

笑顔のおばあちゃん

○寺町通り

なだらかな上り坂を、居酒屋『龍』と書かれ荷台に大きなカゴを付けた

自転車で走り、二股に別れた道を右に進む直行の後姿

○丘の上のカフェ『夕日』

店の前の看板に『OPENING CLOSING』と書かれて
いる。

坂を上って来て、カフェの前に自転車を止める直行

○丘の上のカフェ『夕日』店内

扉を開くと小さな鈴の音が鳴り、奥の方から女性の声がする。

真由子（声）「いらっしゃいませ」

店内にはBGMはなく、静かである。

全体が木造の落ち着いた雰囲気、テーブルや家具も木で作られたアン
ティークなデザインで統一している。

窓際にテーブルが並んでいて、イスは全て窓の外に向いている。

直行が進む通路の壁には、一枚の絵が飾っており、その前で立ち止まる。

直行「これって…」

直行が小学校の時に賞を貰った作品が、立派な額に入れて飾られている。

お水とメニューを持って来た女性が、立って絵を見ている直行に

真由子「お好きな席にどうぞ」

直行「あの…」

真由子「はい」

直行「浅野さん？」

真由子「はい…えっと…」

直行「あ、いや…」

絵を見る直行の視線を見て、真由子も絵に目をやり

真由子「え？坂木くん？」

直行「うん…」

短い沈黙が流れ

真由子「あ、絵……ありがとね」

直行「久しぶり、だね。」

真由子「うん、久しぶり」

○丘の上のカフェ『夕日』店内

直行以外に客はいない。

函館湾（正面に松前半島・江差方面）に向かって、並んで座っている2

人の後ろ姿

笑い出す真由子の背中

真由子「それ、全然違うから」

直行「そうだったんだ…」

真由子「そうだよ。お父さんの天狗が原因じゃなくて、母親が男作って函館から出て行ったのが離婚の原因。いたって普通の理由だから」

直行「普通の理由か。そうだったんだ」

真由子「あたしは、お父さんが好きだったから、ホントはお父さんと一緒に函館に居たかったんだけど、それだと母親…あの人も体裁が悪かったんじゃないかな」

直行「体裁か…」

真由子「たぶん、お父さんが天狗に入り込んだのは、あの人の浮気に気づいた頃からじゃないかな」

直行「え？」

真由子「え？」

直行「入り込んだのはホントなんだ」

真由子「うん。こだわる人だからね。あの頃の事って、断片的にしか覚えてないけど、町の人たちは大変だったみたい」

直行「そうなんだ」

真由子「毎日のように町内会の人たちが家に来て『今日こそ、ヒデを連れて帰ってくるから心配すな』って言って、お父さん探しに行ってた。」

直行「山上大神宮に？」

真由子「…知ってたんだ。」

直行「修行、してたんでしょ？」

真由子「さあ？」

○幸坂通り（22年前・夕方）

町内会長を先頭に、役員4人が坂を登ってくる。

役員1「ホントですか？」

役員2「ええ、どうもこの裏に住んじやってるみたいですよ。」

役員3「住んじやマズイっしょ！」

役員1「会長も、なんでヒデに頼んだかなあ。あの人こだわる人だって知ってるでしょ？」

会長「今更そういうこと言いなさんなよ！みんなだって、ヒデのこだわり方は

半端じゃないから、いい天狗になるって言うたでしようが!」

役員1 「いや、そうだけど、ここまでこだわるとは思わなかったもんなあ?」

役員2 「鼻なんて、特別に作ったんだって?」

役員3 「ありゃ、よくできてるもんな。」

役員1 「こだわってるもんな」

役員2 「仕事…辞めたんですって?」

役員3 「それはダメだよ。仕事あつての天狗でしょ?」

○山上大神宮

階段を上って、息を切らしてる4人は、境内や裏山に向かって叫ぶ

会長 「ヒデ、居るか、聞こえてるかあ」

役員1 「ヒデ、シャレになってねえぞ!」

役員2 「なんも、ここまですることないだろ!」

会長 「奥さんはさあ、町のみんなで説得してっから安心しろって!」

役員3 「そうだあ!まずは姿現せって!」

木から木に、何かが飛び移る音

4人 「うわッ、うわッ、うわわわわ」

会長 「ヒデか?」

役員2 「いやいや、鼻か何かじゃないの?」

役員1 「さすがに飛べないでしょ?」

会長 「わかんねえぞ、あいつのこだわりは半端じゃねえからな。あいつなら、

飛ぶかもしんねえぞ」

役員3 「飛んじゃダメだよ、飛んじゃ…」

○丘の上のカフェ『夕日』店内（現在）

真由子「きつと、家に帰ってくるのが嫌だったんじゃないかな。あの人も、帰ってこられたら、それはそれで困ると思って、町の人たちに気づかれな
いように出て行ったんだと思う。」

○入舟町（22年前明け方）

人気のない入舟の町

真由子と真由子の母の後ろ姿

何度も後ろを振り返る真由子は、直行の絵を持っている。

○丘の上のカフェ『夕日』店内

夕日に照らされている直行の絵

直行のアイステイーは飲み干して氷だけになっている。

真由子「高校生の時には一人暮らし始めて、ほとんど家には帰らなかったし、あの人とは、高校卒業してから一度も……15年くらい会ってないな。
好きになれなかったんだよね、新しいお父さん」

直行「そう…」

真由子「そうだ！」

直行「え？」

真由子「絵、描いてるの？」

直行「あ…」

真由子 「ほら、画家になるって言ってたじゃない？」

直行 「え？そうだったっけ？」

真由子 「言ってたでしょ！え、忘れたの？」

直行（声） 「忘れてなかった」

直行 「言ってたかな、そんな事」

真由子 「言ったよ」

直行（声） 「観覧車の上で」

直行 「そうだったっけ」

真由子 「言ったもん」

直行（声） 「聞こえてないと思ってた」

○函館公園・観覧車の上（22年前）

真由子の後ろ姿を見てる直行

直行 「ごうよ」

振り返る真由子

真由子 「え？」

真由子の顔が正面に近すぎて、下を向く直行

直行 「あの絵、あげるよ」

真由子 「ホントに？」

直行 「明日、先生に言っつて、廊下に貼つてあるのを返してもらつて…」

下を向いてる直行は小さな声で

直行 「僕は画家になるから、また描くから、あの絵は」

顔を上げて

直行「あげるよ。転校するから、あげる。」

真由子「ホントにホント？」

直行「うん」

真由子「ありがとうー！」

また振り返って海を見てる真由子

真由子の後ろ姿を見ている直行

○丘の上のカフェ『夕日』店内

直行のグラスの氷が溶けて水になってる

真由子「もう、描いてないんだ…」

直行「……」

真由子「でも、そっだよね…」

直行「え？」

真由子「変わらずに夢を持ち続けるのって、それはそれで大変だもんね」

直行「うん…そっだね。」

真由子「札幌には、いつ帰るの？」

直行「え、あ、週末に帰る、つもり」

真由子「そっか」

○函館湾

大型船舶が航行している

夕日で海面がキラキラしている

○丘の上のカフェ『夕日』店内

静かな店内に船の汽笛が聞こえてくる。

直行「お客さん、来ないね」

真由子「あ、この店、日が沈んだら閉店だから、もう来ないと思う」

直行「そっか。でも日没ってさあ、分かりづらいよね」

真由子「そう?」

直行「日が沈んでも、しばらくは明るいし…」

真由子「そうだね。でも、分かりづらいぐらいが、ちょうどいいかも」

直行「……」

レジまで歩きながら

直行「お父さんとは会ってるの?」

真由子「コッチに戻ってきた時に、会いに行ってみただけど、引越しちゃ
ってたから」

直行「そうか…」

真由子「会っても分かんなかったかも」

直行「……」

真由子「正直、あんまり覚えてないんだよね、顔も声も」

直行「そう…」

真由子「天狗の顔は覚えてるのに…変なの」

直行「そうだね。また、札幌に帰る前に…」

直行は、後ろに気配を感じ振り返る。

寝起きの顔をした子ども（4歳）が立っている。

直行「え？」

真由子は、レジから出てきて

真由子「あ、ゆうくん、起きたの？ママのお友だちに『こんにちは』は？」

直行「ママ？」

真由子の後ろに隠れる子ども

真由子「ごめんね、人見知り激しくて」

直行「結婚、してるんだ？」

真由子「うん。でも、してた。が正解。別れて、こっちに戻ってきたから」

直行「そうなんだ…」

真由子は子どもを抱きながら

真由子「離婚のDNAなのかな？」

直行「……」

○温泉旅館の駐車場（日没・少し明るい）

電話してる前川

前川「へえ、子どもいたんだ。まあ、そりゃそつだ。もう俺たち3人だけ」

○函館公園（日没・少し明るい）

観覧車の下に止まっている自転車

観覧車の一番高いワゴンに乗って、電話してる直行

直行「そうだな…32か。え？元気そうだったよ。お店が落ち着いたら、みんなと会いたいって言った。顔わかんないだろうけど。え？そうだな、今日は、お袋のところかな。まだ知らされてない事が、あるかもしれないから、札幌に帰る前に全部聞いとかないとな。また連絡するわ。じゃあな。」

電話を切って、ワゴンの上から地面を見下ろす直行。

直行「こんなに低かったかなあ」

観覧車から降りようとして立ち上がると、遠くに天狗が歩いてるのを見つける

直行「え？うそだろ！」

慌てて、観覧車から降りて、天狗が見えた方向に走っていくと、22年前に見た天狗に似た姿を見つけて後を追う。

雪駄を履き、手には八手の形をした紙のウチワを持っている。後ろから見ると、チラチラと長い鼻が見え隠れする。

直行「あの…天狗だ。」

日暮し通りを歩き、函館八幡宮を越えて、少し歩くと古い家があり、玄関の前で長い鼻を取る天狗

直行「ええ〜ッ」

家に入っていく天狗

呆然と立ってる直行

直行「鼻、取った…」

○天狗の家の玄関前

玄関の前に立って、しばらくして裏に回り、窓から家の中を覗く直行
ジャージ姿に着替えて、普通の鼻の長さをした天狗と目が合い、固まっ
て動けない直行

天狗はゆっくり窓の方に歩き、窓を開けて

天狗「なんだ？」

直行「え、あ、いや…」

天狗「用がないんだったら帰れ。」

直行「はい……」

窓を閉める天狗

○天狗の家の玄関前

直行は、そっと扉を開けて

直行「あの…すみま、せん」

しばらくの沈黙に諦めて帰ろうとするが

直行「やっぱり、あのお、用がないというワケでもなくて…」

同じように沈黙が続く

直行「真由子さんと小学校が同じで…」

長い沈黙に、直行が諦めて帰ろうと玄関を出る。

天狗「上げれ」

振り返ると天狗が立っている。

○天狗の家の居間

丸いちゃぶ台が置いてある和室で、座布団に座っている直行
テーブルの上に置いてある鼻を見ながら

直行「良く出来てますね。」

天狗（秀樹）は、テーブルに置いてた鼻を取ってケースにしまい、タン
スの引き出しに入れる。

秀樹「で、なんだ？」

直行「真由子さんの…お父さんですよね？」

背を向けたまま話す秀樹

秀樹「そうじゃなかったら、部屋に上げとらんだろ」

直行「はあ…」

秀樹「……」

直行「ずっと、続けてるんですか？」

秀樹「……」

直行「天狗、ずっと続けてるんですか？」

秀樹が振り返ると直行がジッと見てる。

直行の視線から目をそらして、小さなため息をつき

秀樹「今でも、頼まれる時があるんでな」

直行「頼まれるんですか？え、誰に？」

秀樹「いいだろ、そんなことは」

直行「そうですね…」

また、沈黙が続く

直行「探してみました…真由子さん。」

秀樹「……」

直行「あなたの事」

秀樹「……」

○天狗の家の居間（夜）

テーブルには、少しの料理と日本酒が置いてある

けっここう酔ってる2人

直行「僕は、そろそろ…」

立ち上がるうとする直行を座らせる秀樹

秀樹「真由子がそう言ったのか？」

直行「え？」

秀樹「だから、さっきの話だよ！」

直行「さっきの…ああ」

秀樹「真由子が、言ったんだろ？言ったんだよな？」

直行「はい、言っていました。お父さんが天狗にこだわったのが原因じゃなくて、

こだわる前に…」

秀樹「そうか、真由子がそう言ったのか」

直行「はい」

秀樹「でも、それは違う、うん、違うぞ」

直行「……」

秀樹「違うんだ。こだわる前じゃない。どっちが先で、どっちが後じゃない。

原因は、ワシで、ワシが家族をバラバラにした。」

直行「……」

秀樹「出て行ったのはアイツらだが、捨てたのはワシだ。」

直行「捨てた？」

秀樹「…追いかけてなかった。」

直行(声)「真由子のお父さんの話を聞きながら、全然違うことを考えていた。

自分が追いかけてなかったのは夢だ。俺は、画家になる夢を捨てて追いかけてなかった。そんなことを考えていた。」

秀樹「子供の頃の記憶なんていうのは曖昧だ。曖昧だから、どれが現実でどれが夢だったか分からなくなる。昔の記憶なんてのは、都合のいい記憶に変えられるんだ。いくらでも変えられる」

直行「都合のいい記憶…」

秀樹「大人になってからは、そうはいかんぞ！」

直行「え？」

秀樹「楽なものな、都合のいい記憶に変えられれば、もっと楽なものにな」

直行「ええ、そうですね…」

秀樹「昨日あった現実が夢で、明日見る夢が現実だったら、楽なものにな」

直行「楽、ですね」

月明かりに照らされた函館の海が、窓から遠くに見える。

○天狗の家の居間（夜）

更に酔ってる2人

秀樹「飛べない飛べない。いくらなんでも飛べるわけないだろ！」

直行「いや、いやいやいや」

秀樹「ムササビじゃないんだからな！」

直行「いや、でも天狗でしょー！」

秀樹「無理言うな！」

直行「でもなあ、松の木から観覧車まで飛んだの見たのになあ」

秀樹「飛べないって、天狗が言っとるんだから間違いないだろー夢だ夢」

直行「そうだったのかなあ」

秀樹「おい！」

直行「はい？」

秀樹「天狗になれ！」

直行「は？」

秀樹「いいか！男は天狗になるぐらいじゃないとダメだ。天狗になって、鼻を

へし折られて、そこからもう一度伸ばせーそうじゃなきゃダメだ！」

直行「はあ…」

秀樹「天狗にならなきゃ折られる鼻もないだろ！」

その場で寝てしまう秀樹

直行「むちゃくちゃだな。」

○天狗の家のキッチン

洗い物をしてる直行

居間のテーブルはキレイに片付けられている。

その横で、布団をかけられて寝てる秀樹

洗い物を終えて水を止めると、弱く細い声で

秀樹「元気だったか？」

直行「…」

秀樹「真由子は…元気だったか？」

振り返ろうとするが、振り向くのをやめて答える直行

直行「はい、元気そうでした。」

秀樹「ならいい。元気ならそれでいい」

○天狗の家の玄関

家から出てきて大きく息をする直行

直行「天狗になれ。か」

○天狗の家の居間

眠ってる秀樹

テーブルの上には、すり器とりんごとお酢とメモが置いてある。

○函館公園

自転車を押しながら帰る直行

直行「ん？俺はどこに帰ればいいんだ？」

○龍馬像の前

自転車を停めて、龍馬像の前に立つ直行

直行「あの人は、たった一人で天狗をやってきた…」

龍馬像と同じポーズ、天に向かって人差し指を指す。

直行「龍馬と一緒にしちゃ失礼だな」

笑いながら、自転車を押していく。

○居酒屋『龍』の前

閉店してるが、店の中は電気がついてる。

自転車を停めて、店に入ろうとすると、中から父親と母親の音がする。

龍介(声)「もう、それぐらいにしとけって」

直行「え？」

○居酒屋『龍』店内

カウンターに佳恵が座って日本酒を飲んでいる。

カウンターの中で、龍介が店の後片付けをしている。

佳恵 「酔ってません！わたしは全然酔ってませんから。」

龍介 「そう言うの。酔ってる人は、みんなそう言うの。」

佳恵 「ねえ、聞いている？私の言ってること、ちゃんと聞いているの？」

龍介 「聞いてますよ。」

佳恵 「じゃあ、なんで売ったの！なんで旅館売ったのよ！」

○居酒屋 『龍』前

店の前で話を聞いてた直行は、店に入ろうとする。

龍介（声）「お前が言ったんだろ。お前が、旅館を売ってマンション買って慰謝

料払えって！」

佳恵（声）「なんで言う通りにするの！」

店に入るのをやめる直行

佳恵（声）「他のことは頑固なのに、なんでそういうことだけ、言うこと聞い

ちゃうのよーちょっと、もう一杯ちょうだい！」

○居酒屋店内

龍介 「いや、今日はもう…」

佳恵 「はあ？」

龍介 「はい、分かりましたよ。冷で、いいのかな」

カウンター奥で、グラスに日本酒を注ぐ龍介

グラス半分のお酒を入れて渡そうとするが、カウンターで寝てる佳恵

龍介「あくあ、こんなところで寝るなよ」

○居酒屋『龍』の前

扉の前で笑ってる直行

直行「いよいよ、帰るところがなくなったな…」

店から離れて歩いて行く直行の後ろ姿

○函館駅前（次の日の朝）

ポストンバックと朝市で買ったイカめしを手にとってる直行

前川「帰るの、週末じゃなかったのか？」

直行「ああ、ちよつとな」

前川「仕事か？」

直行「仕事って？」

前川「はあ？」

直行「俺、言わなかったっけ？」

前川「何を？」

直行「とりあえずだ。って」

前川「ん？」

直行「働いて金貯めるだけだ。って」

前川「ああ」

直行「金貯まったら」

笑っている前川

前川「分かったよ！」

直行「じゃあ、札幌行ってくるわ」

前川「めんどくせえヤツだな。ったく」

○函館駅改札

改札を抜けて、後ろ向いたまま手を上げて前川に手を振り、人差し指を天に指す直行

○スーパー北斗車内

朝日に照らされた大沼を見てる直行

直行（声）「故郷は、しょっちゅう帰ってくるころじゃない。しんどい時に帰ってくればいい。ここだけは、きっといつでも迎えてくれる。帰る場所がなくなったら、帰ってくればいい。故郷は、やっぱり帰る場所だ。」

○札幌のデザイン事務所

社長のデスクの前に立つ直行が、頭を下げて振り返る。

笑顔の直行と、啞然としてる社長

社長のデスクには、直行から渡された辞表とイカめしが置いてある。

社員のデスクの間を抜けていく直行は、吉田のデスクの前で立ち止まり

直行「おう、吉田！俺、天狗になってたわ。」

吉田「は？」

直行「いや、違うな。天狗にもなれてなかったわ。」

吉田「え？ああ…え？」

直行「じゃあな」

事務所の扉から出て行く直行

○丘の上のカフェ『夕日』 夕方

メモを持った天狗が坂を登ってくる。

メモには『天狗の依頼』という文字と地図が書いてある。

店の外で、子ども（ゆう）が、一人で遊んでるのを見つける。

○丘の上のカフェ『夕日』の店内

直行の絵を見ている真由子

外で、ゆうの笑い声とはしやぐ声が聞こえてきて、店の外に出る。

○カフェ『夕日』の外にある広場

ゆうが、天狗の鼻を持って走り回っている。

秀樹「返しなさい！それ、返しなさい！ね、返して、いい子だから」

外に出てきた真由子と目が合い、立ち止まる秀樹

真由子は、目に涙をためて笑っている。

ゆうが、真由子のところに走ってきて、鼻を渡す。

ゆうから鼻を受け取って

真由子「鼻、折られたんだ？」

秀樹「もう、天狗は引退だ」

声を殺して泣きながら、秀樹の元に走って抱きつく真由子

真由子を抱きしめる秀樹の目にも涙が溢れている。

真由子は、こらえきれずに声を出して泣いている。

2人を夕日が照らしている。

○直行の札幌のアパート

大きなキャリアバッグに画材とスケッチブックを入れて、バックを閉じる直行

部屋には、ダンボールが一つ残っている。

引越し業者がやってきて

業者「あとは、このダンボールとキャリアバッグでよろしいですか？」

直行「いや、ダンボールだけで、バックは大丈夫です。」

業者「はい、かしこまりました。どうもありがとうございました。」

部屋を出て行く引越し業者

部屋の真ん中に座って電話をかける直行

直行「あ、お袋？明日、そっちに俺の荷物届くから、しばらく預かっていて。

え？まあ、1ヶ月になるか3年になるか分かんないけど…ごめんね、会

社辞めっちゃって」

キャリアバッグの横に置いてあるポーチから少し出てるパスポートと

フランス行き飛行機のチケット

直行 「え？ああ、親父のところに、ちょっと前に荷物送った。全部お袋のところも迷惑だらうって思ったからさ…」

○龍介のアパート

フタの開いたダンボールが一箱置いてある
部屋の真ん中に置いてあるダンボールには『高1〜26歳』と書かれている。
ダンボールの中には、画用紙やスケッチブックに書かれた絵が、そのまま入れられている。

○丘の上のカフェ 『夕日』店内（日没前）

Ｔ 『1年後』

海外から届いている大きくて薄いダンボールが開けられている。
壁には、たくさんの絵が掛けられている。
すべての風景画には海が描かれている。
用紙一面が海の絵もあれば、町の奥に少しだけ海が描かれてる絵もある
額に入れた絵を飾ってる真由子
エプロンをしてアイスティーを持った秀樹が、真由子の後ろに立って

秀樹 「真由子、あいつは真面目に絵を描い取るのか？」

真由子 「え？」

秀樹 「見たぞ。内容はよく分からんが…」

アイステイーを飲みながら、フランスの雑誌を真由子に渡す。

真由子「ああ、これね。ちょっと、そのアイステイーって、あたしに入れてくれたんじゃないの？」

秀樹「ん？あッ、そうだった。すまんすまん、今、入れてくる。」

厨房に戻っていく秀樹。

真由子「ホント、真面目に描いてんのかな」

雑誌を開くと見開きのページに大きく『Peintre du Japon

【HAKODATENGU】

和訳『日本から来た画家【HAKODATENGU】』

と書かれて、写真が載っている。

天狗のカッコをして、手に持ってる八手には、小さく『14代目・はこだ天狗』と書かれている。

雑誌には『Il dit aux enfants d'être un tengu ! Dire』

和訳『彼は子どもたちに、天狗になれ！』と書かれている。
扉の開く鈴の音が鳴る。

真由子「いらっしゃいませ」

その場に置いた雑誌には、天狗になった直行が笑顔で写っている。

真由子と客の声がかすかに聞こえる店内

真由子（声）「日没で閉店なんですけど、よろしいですか？」

客（声）「はい、それを聞いてきたんです。」

真由子（声）「では、お好きな席へどうぞ。」

たくさん飾られてる絵の中に、真由子が小学校4年生の転校前に直行の

絵とすり替えた絵が飾ってあり、その横には直行の絵が飾ってある。
2枚の絵が夕日に照らされている。

函館湾を照らしながら、沈みかける夕日

おしまい